

金次郎物語

【第1部】子どものころの金次郎



第1部では、子どものころの金次郎さんの物語が始まるよ。いろいろな苦勞くろうをしながらも、一生けん命勉強にはげむ様子や、あきらめずにさい後までやりぬき、せいこうした話がたくさんあるよ。そうだ、みんなの学校にある金次郎像ぞうのなぞもとけるかな。



へえ～。子どものころの様子が物語になるなんてすごいな。いろいろな苦勞くろうがあったっていうけれど、だいじょうぶだったのかな。それだけすごい人なのかもしれないな。

金次郎さんのなぞがとけるの。それは楽しみ。わたしたちと同じ子どものころの金次郎さんって、いったいどんな人だったのかな。



(1) 勉学にはげむ

6才になったころ、金次郎は父に向かって言いました。

「お父さん、ぼくも勉強して字をおぼえたいんだ。勉強させてください。」

「なに、勉強をしたって。金次郎、お前はどんなことをおぼえたいんだ。」

「いつもお父さんが、読んでいるような本を、自分で読めるようになりたいんだ。だからお父さん、ぼくに文字を教えてください。」



むすこの金次郎に、文字の読み書きを教えると言われた父（利右衛門）はびっくりしました。金次郎の顔を見ると、その目はかがやいています。学問好きの父です。

（金次郎の言うことにうそはない。よし。どのていどまで教えられるかわからないが、できるかぎり教えてみよう。）と、父は心に決めました。

けれども、父にはこまる一つがありました。それは、金次郎が5才の時、*酒匂川の大こう水により田畑がすべて流され、そのために、今はとてもまずしいくらしをしていたのです。勉強するには、文字の読み書きに使用できる手本や練習用の紙を買わなければなりません。しかし、それらを買うよゆうはとてもありませんでした。

文字を教えるにせがむ金次郎のために、父は自分で習字の手本を作ることになりました。使い古した紙のうらに文字を書き、手本としました。けれども、練習に使う紙がありません。考えに考えて、木

*酒匂川：神奈川県を流れる川。大雨がふると、水があふれ、人々を苦しめた。

で作った小さな手箱てばこすなに砂を入れ、その砂に指で文字を書いて手習いをさせることにしました。

そのような手箱の文字の練習であっても、金次郎はうれしくてたまりません。（なるほど、この字はこう読むのか。）さっそく父の手本を見て、指で書いてみました。指に力をこめて書くと、文字がくっきりとされるされていきます。金次郎は、目をかがやかせて言いました。

「お父さん、『河原』はどう書けばいいの。」

「『栢山』って、こういう字だったんだね。」

父は、金次郎の聞くことの一つ一つに、ていねいに答えました。その答え方は、いつも真けんでした。このころの父は、昼はあれた田畑をたがやし、夜はおそくまでなわをなうなどの夜なべ仕事をしていました。体はとてもつかれましたが、

金次郎に文字を教えることは、父の大きな楽しみとなっていたのでした。それは、

（ただ、がむしゃらにはたらくだけではだめだ。りっぱな人間になるには、学問むようをすることだ。今の二宮家には無用のもののように思えるが、そのうちにきっと学問が身を助けてくれるにちがいない。

金次郎には、学問をしてりっぱな人間に育ってもらいたい。）とねがうようになったからです。

こうした父のねがいが、金次郎につたわらないはずがありません。

（もっとたくさん字をおぼえて、いろいろな本を読みたいな。）金次郎は、毎ばん欠かさず父と勉強しました。そして、新しい文字をおぼえていくことが金次郎のよろこびでした。

金次郎が11才になった時、父は、病気になってしまいました。病



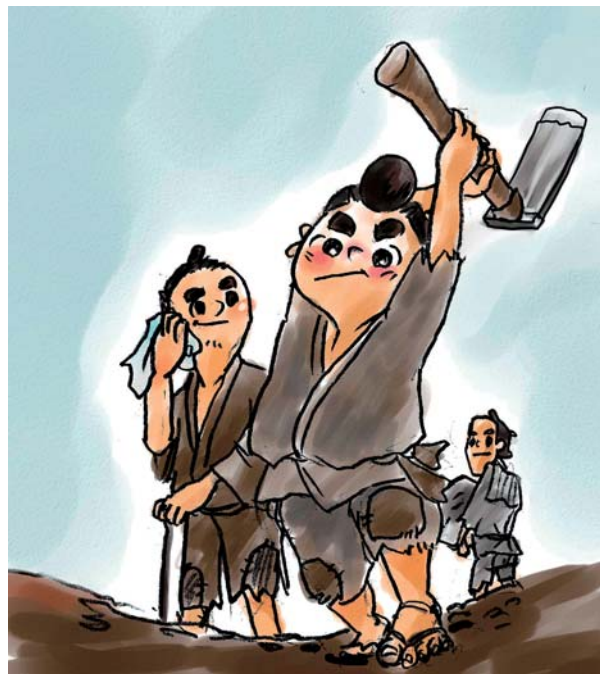
【第1部】子どものころの金次郎

勤
勞

気の父に代わって、土手の改修工事かいしゅうなどの仕事に出た金次郎ですが、大人の中に入ってはたらくことは、おさない金次郎にとっては大へんなことでした。（お父さんは毎日こんなにきつい仕事をしていたんだ。）毎日家に帰ってくるころには、足こしがいたく、体もつかれはてていました。

父の代わりに母と弟たちの面どうを見ながら、大人の中で毎日のはたらき勉強しつづけることはかんたんなことではありませんでした。しかし、くじけずにがんばることができたのは、父のねがいが、しっかりと金次郎に受けつがれていたからです。

金次郎のために一生けん命文字を教えてくれたやさしい父のことを思うと、金次郎の勉強しようという意よくは、ますます強くなっていきました。（本は、ぼくにたくさんを教えてくれる。わからないことがわかる。できなかったことが、できるようになる。新しいことを学ぶっておもしろいな。）



来る日も、来る日も、せいっぱいはたらき、そしてどんなにつかれていても、夜おそくなくても、金次郎はよろこんで勉強しました。



なっとく 金次郎 ②

きん ろう
勤勞とは、
どんな教えだろう。



一言で言えば「はたらく」ことだよ。そして「一つのことに真けんにさい後まで取り組む」ということだよ。「一生けん命はたらけば、人間は生きていくためにひつようなものを得ることが出来る。しかし、はたらかなければ、食べることにもこまるであろう。」目の前にあるやるべきことを一生けん命やることを金次郎さんは教えているんだよ。



チャレンジ 金次郎 ①

て つだ
毎日、お手伝いを
しているよ。



みんなも勤勞にちょうせん!!

仕事が大へんでも
勉強しつづけた金次郎さん。
みんなも、金次郎さんのように
こつこつと毎日楽しく
つづけられるものを見
つけよう!



金次郎さん 勤勞達成たっせい

★★★★ 根気よくさい後まで
仕事をする。

★★★ みんなのために仕事をする。

★★ 決められた仕事をきちんとする。

★ 自分のことは、自分でする。



(2) 金次郎のわらじ

勤
勞

至
誠

推
讓

「うわあ、今年もこう水にやられてしまった。またみんなでおおすとするか。」

金次郎が12才の時のことです。金次郎の住んでいる相模さがみの国栢山かやま村には酒匂川さかゐという川が流れていました。この川はとくべつ大きい川ではありませんが、よくこう水を起こして、近くの村に住む人々を苦しめていました。

「みなさん、ぼくも手伝わてつだせてください。」

「よし、わかった。しっかりたのむぞ。」

金次郎は、病気のお父さんに代わって、子どもではただ一人、大人の中に入ってはたらきました。土や石を遠くから運んで来ては、土手につみあげるのです。それは、大人でも大へんほねのおれる仕事でした。ですから、12才の金次郎にとっては、それはそれは大仕事でした。

しかし、金次郎は、どんな大仕事でも弱音をはきませんでした。（病気で休んでいるお父さんの分までがんばろう。そして、早く土手をなおすんだ。）

ほかの人たちがひと休みしている間も、一人でせっせと仕事をつづけました。そんな金次郎の様子を見て、

「おおい、金ぼう、休めよ。無理むりをするなよ。」

「そんなにがんばると体をこわすぞ。お茶でも飲んでひと休みだ。」

と、村の人たちがいくらそうよびかけても、金次郎は、

「だいじょうぶです。先に休んでいてください。」

と言っいては、重たい石や土を運ぶのでし



た。（みんなのはたらきにくらべたら、自分はまだまだだ。みんながひと休みしている間に、自分の足りない分を少しでもおぎなうために、はたらかなければ。）とっていました。村の人たちは、そのような金次郎の様子を見て、

「金ぼうはよくやるな。本当に感心な子だ。」
と、口々にほめました。

その日の夕方、村の人たちが帰ってしまったあと、金次郎は（村の人たちはみんな親切でよい人ばかりだ。どうしたら、もっと役に立てるのだろう……。）と考えこんでいました。

家に帰った金次郎は、（村の人たちのわらじはすり切れていて、足がとてもしたそうだったな。新しいわらじがあれば、きっとよろこんでもらえるだろう。）と思い、夕ごはんをすませるとすぐに土間におりて、わらをさがしました。

しかし、わらじをあみ始めた金次郎は、こまってしまいました。わらじの大きさをどのくらいにしたらよいのかわからないのです。そこで金次郎は、（仁平さんの背は、お父さんと同じくらいだったな。よし、お父さんのわらじと同じ大きさにして作ろう。熊吉さんは、背が少しひくいから、このくらいの大きさかな。）と、一人一人の村人を思いうかべながら、夜はおそくまで、何足もわらじをあみつづけました。

わらじができたよく朝、だれよりも早くかわらに行き、みんなに知られないように、あんだわらじを、ここに1足、あそこに1足とおきました。

ところが、わらじを見つけた村の人たちは、

「おや、わらじを落としていった人がいるぞ。きっと、こまって、あとからさがしに来るにちがない。」
と言って、近くの木のエダにわらじを

勤きん勞らう至し誠せい推すい讓じょう

【第1部】子どものころの金次郎

勤きん勞ろう

かけておくばかりでした。それを見た金次郎は、（せっかくあんだのに、どうして使ってくれないのだろう。）とがっかりしてしまいました。

至し誠せい

しかし、（村の人たちは、気のいい人ばかりだ。だれかが落としたわらじだと思って、自分の物にできなかったにちがいない。）とも思うのでした。

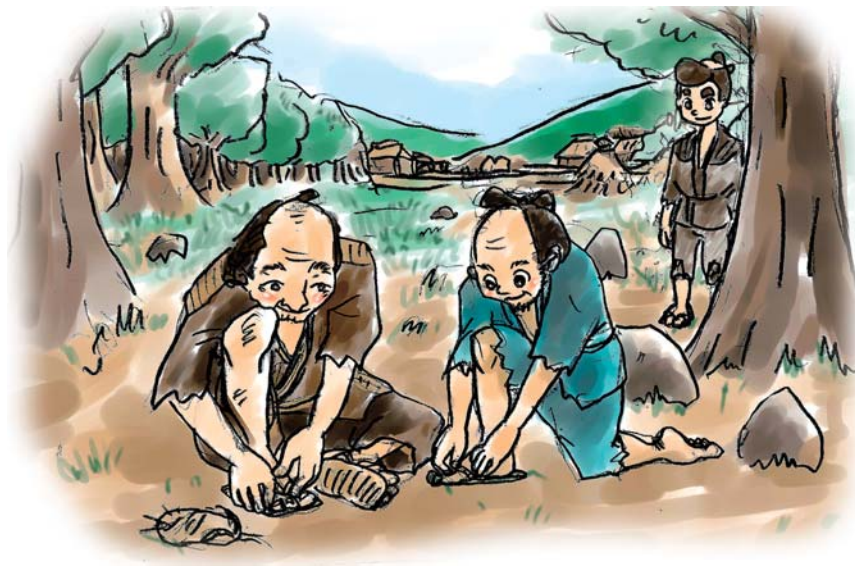
次の日の朝、今度はまるでだれかが捨すてたように、わらじをばらばらにしておきました。すると今度はうまくいきました。わらじを見つけた村の人たちは、

推すい讓じょう

「おや。ここに、こんなに新しいわらじが投げ捨ててあるぞ。もったいないな。だれかが捨てた物ならはいてもかまわないだろう。」と言いながら、わらじをはきました。すると、とてもはきごちがよいのです。重い土や石を運んでいると、わらじはすり切れて、かわらの石が足にくいこんできます。そのいたさは、とてもがまんできるものではありません。はげしい仕事ですから、新しいわらじが何足もひつようです。しかし、昼間のつかれで、夜、自分のわらじをあむ時間はなかなかもてません。村の人たちの多くは、よびのわらじを持って仕事に行くことができずにいたところでした。

「こりゃあ、ありがたい。よし、これなら仕事もはかどるぞ。今日もがんばってはたらくとするか。」

金次郎は、そんな村の人たちの様子を見て、心がほっとして、にっこりするのでした。





なぜなぜ 金次郎 ②

金次郎さんのことを
もっとくわしく
知ろう。



Q1

金次郎さんは、1787年に今の
神奈川県小田原市かながわ おだわらに生まれた
んだ。さて、金次郎さんは何才
まで生きた？

- A. 50才
- B. 60才
- C. 70才

昔の人は
何才ぐらいまで
生きたかな



Q2

金次郎さんは、お米をつきなが
らうすの周りをぐるりと回っ
ては本を読み勉強したんだ。さ
て、それが理由でついたあだ名
はどれ？

- A. ぐるりいっぺん
- B. うすぐるり
- C. ぐるり金さん

うすの周りを
ぐるり…？



Q3

大人になった金次郎さんの身長
は何cm？

- A. 約146cm
- B. 約166cm
- C. 約186cm

しゃく すん
6尺2寸で
聞いたよ



Q4

金次郎さんが家を立て直し、
こつこつとためたお金いっせんが一干
文もん(今のお金で1,000万円)になっ
たときにしたことは何？

- A. 温泉旅行おんせんに行つて
ゆっくりした
- B. まずしい人たちにお金を
わけてあげた
- C. 大きな蔵くらにお米を集め
災害さいがいに備えたそな

金次郎さん
だからきっと…



答えはわかったかな？
もっとほかにも金次郎さんのことを
調べてみよう！



答え/Q1: C, Q2: A, Q3: C, Q4: B

勤きん
勞ろう

至し
誠せい

推すい
讓じょう

(3) まきをせおった金次郎

「ほれ、また金さんが通るよ。」

「農民が、あんなに大声出して本を読んで、いったい何になるんだい。」

「それに何もまきをせおって、歩きながら読むこともあるまいに。」

「いやいや、金ぼうは感心なはたらき者だよ。あんな子どもでも、お母さんと二人の弟のくらしを立てているんだから。」

今日も、いつものようにまきをせおって歩きながら、大声で本を読みながら通る金次郎を見て、村の人たちがうわさをしています。どんなうわさが聞こえようが、それによって金次郎が本を読むことをやめようとはしませんでした。それどころか、ますます真けんまけんに読むようになりました。

金次郎が14才の時、長く病気でねていたお父さんがなくなりました。あとには、お母さんと金次郎、そして二人の弟がのこされました。

お父さんが病氣中に、金次郎の家の田畑のほとんどは、人手にわたってしまいました。ですから、今では金次郎の家は、村中に知れわたるほどひどいびんぼうになっていました。そのうえ、金次郎は、お母さんを助けて、二人の弟を育てなければなりません。

「お母さん、安心してください。わたしが一生けん命はたらきます。」

人手にわたった田畑を、もと通り買
いもどしましょう。」

と金次郎は、お母さんと約束やくそくして、今まで以上の努力いじょうどりよくを始めました。朝早くから田んぼに行って、こう水で流れてきたどろや石を取りのぞき、よい田になおし、夜は夜でなわをない、わらじを作って売り、くらしを立てました。



しかし、そのくらいのがんばりでは、とても間に合いません。そこで金次郎は、朝うす暗いうちに起きて、4キロメートルもはなれた山へたきぎとりに出かけ、それを町へ売りに行くことを始めました。金次郎が、大きなまきのたばをせおって通ると、村の人の中には、



「おい、見ろ、見ろ。ぼろ金さんのお通りだ。」

などと、ひやかす人もいました。なるほど、金次郎の着物は、ほころびはぬってありますが、もとのぬのがかくれるほど大きな*当てぬのがしてありました。家がびんぼうになってからは、村の人たちもつめたい目で見るといふようになりました。それでも金次郎は、菌をくいしばってがまんしました。そして（今にみている。自分の家をきつと、もと通りにしてやる。）と、心にかたくちかうのでした。さらに金次郎は、（どうすれば、田畑をもと通りに買いもどすことができるんだろう。）と、真けんに考えました。

もともと、読書が大好きだった金次郎は、本を読むとそれだけ自分の心が広がっていくように思えました。それにえらい人の教えも、だんだんわかって、おもしろく思うようになってきたのです。（そうだ。田畑を買いもどすには、ただはたらくだけではだめだ。学問もしなければ。）と考えつきました。

ところが、金次郎にはこまったことがありました。たきぎとりを始めてからは、どうしても早く起きなければなりません。そうすると、これまで夜なべのあと、おそくまでつづけていた読書ができないのです。金次郎は、その時間をどこで生み出そうかと考えました。（そうだ。いいことがある。家から山までの道を歩くのに1時間、往復おうふくすれば2時間、それを1日に2回やれば4時間もある。その時間に勉強すればいいんだ）

*当てぬの：やぶれたところに当ててぬったぬの。

【第1部】子どものころの金次郎

勤きん
勞ろう

至し
誠せい

こうして金次郎は、まきをせおって歩きながら読書をするようになりました。「^{だいがく}大学」や「^{ろんご}論語」という漢字だけで書かれた中国の大へんむずかしい本です。1回や2回読んだだけでは、とても意味がわかりません。そんな時は、歩きながら大声を出して何度も読みました。わけを知らない村の人たちは、金次郎のこの様子を見て、金次郎は気がちがったのではないかと思いました。

「かわいそうに。あんまりびんぼうで苦勞くろうしたから、ぼろ金さんは、頭がへんになってしまったらしい。」

といううわさが広まりました。しかし、金次郎はそれに負けないで、ますます勉強にうちこみました。

金次郎は、何も好きこのんでまきをせおいながら勉強したわけではありません。そのころの金次郎にとって、この時が一番勉強できる時間だったので、本読みに夢中むちゅうになればなるほど、まきの重さも気になりませんでした。

今日も、人のうわさや悪口など気にもかけないで、重いまきをせおった金次郎の本読みの声が、村中にひびきわたります。





なっとく 金次郎 ③

至誠とは、
どんな教えだろう。



一言で言えば「真心」のことだよ。何事に対しても、真っすぐな心で思いやりをもって行動することが大事なんだ。至誠をもって人や自然にせっしていけば、そのやさしさが自分のもとに返ってくるんだよ。当たり前のようにある食べ物や水、そして周りの人のささえに感謝する心をわすれないでいようね。

「ありがとう」って言われると、
心があたたかくなるね。だれかがよるこんで
くれるとうれしいね！



チャレンジ 金次郎 ②

トイレのスリッパが
いつもきれいになっているわ。
だれがしてくれて
いるのかな。



みんなも至誠にちょうせん!!

至誠とは、何事にも
真心をもって取り組むこと。
村の人のことを思って、
わらじを作った金次郎さんのように、
人がうれしい、助かると
思えることをしよう！



金次郎さん 至誠達成

★★★★ どんな人、生き物、
物事に対しても真心
をもってせつする。

★★★ 真心をもってどんな人にも
やさしくする。

★★ 相手の気持ちを大切にする。

★ 「ありがとう」「ごめんなさい」が言える。

(4) わたしの油

金次郎が16才の時のことです。

「酒匂川の土手がくずれるぞ。」

「また、こう水になるぞ。」

村々には*半鐘はんしょうが鳴りわたりました。

外は真っ暗、どしゃぶりの雨です。

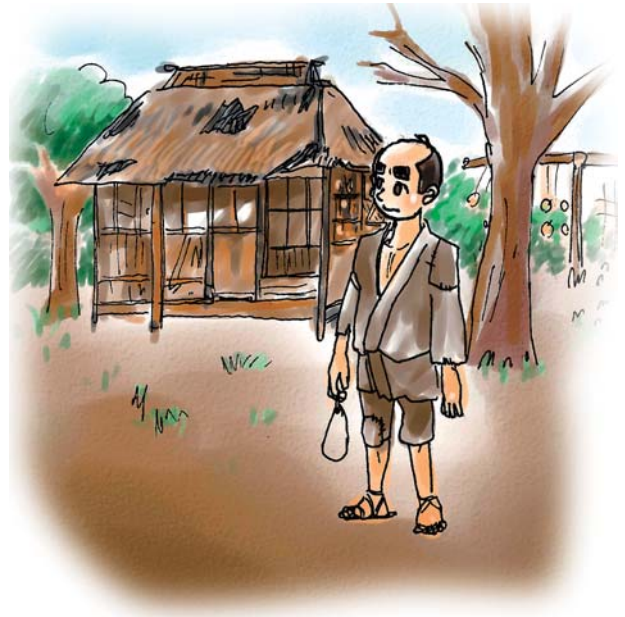
次の朝、金次郎は、自分の家の田んぼの前で、ぼう然ぜんと立ちつくしていました。

お父さんがなくなって2年後、お母さんまでもが病にたおれ、なくなってしまいました。両親をなくし、さい後にのこったわずかばかりの田んぼも、やっと田植えを終えたばかりだというのに、全くのあれ地となってしまいました。（ああ、なんでわたしにはこんな不幸ばかりつづくのだろう。せめてこの田んぼだけでものこっていたら……。これで本当の*無一文むいちもんになってしまった。）金次郎の目から、なみだがとめどもなく流れ落ちました。

くらしにこまった兄弟三人は、住みなれた家を出て、はなればなれにくらすしかありませんでした。小さな弟二人は母の生まれた実家に、金次郎は万兵衛おじさんの所へあずけられることになりました。

家をはなれる時、金次郎は、何度もわが家をふり返りながら、（のこっているものはもう自分のじょうぶな体しかない。いつかまたきつと、弟二人をよびもどし、あの家で三人仲よくくらすのだ。そのためには、万兵衛おじさんの所で、一生けん命はたらくしかない。）と強く心にちかいました。

万兵衛おじさんの家に引きとられた金次郎は、そこに住んでいた万兵衛おじさんの妹の子、円蔵えんぞうとともに、昼は田や畑をたがやし、



*半鐘：火の見やぐらの上などにつり下げ、火災などのけいほうとして鳴らすつり鐘。

*無一文：お金などをまったく持っていないこと。

夜はなわをない、わらじを作り、おじさんの家の仕事を一日中手伝いました。このように、毎日毎日一生けん命はたらいていましたが、なぜか今のくらしに満足できませんでした。

「このままでは、ぼくのねがいはかなえられない。二宮家をもとのようにりっぱな家に立て直すことも、ぼくがりっぱな人間になることもできない。やっぱり、もっと勉強しなければ。」

そうつぶやいた金次郎は、その夜から、仕事をやり終え、おじさんがねるのを待って、勉強するようにしました。円蔵も金次郎の熱心がわかり、おじさんがねむったのを教えるなど、協力するようになりました。

しかし、しばらくして、このことがおじさんにわかってしまいました。

「農民が勉強をしたって、何の役に立つか。勉強なんかできても仕方がない。のら仕事が一人前にできればいいんだ。本を読むのに高い油を使われるのもこまる。家に油がありあまっているわけではないのだ。」

金次郎は、したがうしかありません。

仕方なく、おじさんの言うとおりに

しましたが、勉強をあきらめることができず、どうしたら勉強ができるか考えていました。ある日の夜のことで、円蔵が来て、金次郎に言いました。

「農民が本を読んでも役に立ちませんよ。」

「なぜ本が役に立たないんだ。おじさんにそう言われたのですか。」

「そうです。『本を読む前に、もっと学ばなければならないことがある。空の雲や水の流れ、土にまいた種が育つすがたを見れば、命のすばらしさや不思議さを学ぶことができる。』と、おじさん



が言っていましたよ。」

金次郎は、あの万兵衛おじさんが本当にそんなことを言ったのか信じられませんでした。

それから金次郎は、明かりがもれないように、*あんどんに着物をかけて本を読むことを考えつきました。

しかし、この方法も、すぐにおじさんに見つかってしまいました。

「また本を読んでいるのか。わしの言うことが、聞けないのか。」と、おじさんは本当におこってしまいました。

「おまえの世話をするために、よぶんなお金を使っているんだ。そのおんをわすれて、高い油をむだに使うとは何事だ。そんなひまがあったら、なわでもなっていればいいんだ。」

「はい、もう本は読みません……。」

仕方なく勉強をしない約束をした金次郎ですが、一人になると、また勉強をしたくなりました。次の日も、また次の日も、畑をたがやしながら考えていました。（勉強をしたいなあ。でもぼくが勉強ができる時間は夜だけだ……。これ以上おじさんにめいわくはかけられないし。自由に使える明かりがほしいなあ……。そうだ。ぼくが自分で油を作ればいいんだ。そうすれば好きなだけ勉強ができるぞ。よし、作ってみよう。）よい考えがうかんだ金次郎は、にっこりとうなずきました。

油がとれるアブラナをどこに植えるか考えた金次郎は、次の日、いつものように畑の仕事を終えた帰り道、こう水のあとの川べりへ行ってみました。すると、ほとんどがあれ地になり、石ころだらけで、草もいっぱい生えています。これでは、すぐにアブラナの種をまくわけにはいきません。

どうしても自分で油を作って勉強したい金次郎は、それからとい



*あんどん：木や竹のわくに紙をはり、中に火をともした昔の明かり。

うもの、おじさんの家の仕事が終わると、大へんつかれていましたが、そのあれ地によって、暗くなるまで、石をどけたり草をとったりしました。今の金次郎にとって、勉強が一番大切なものでした。そのために、油はどうしてもひつようだったのです。金次郎は、おじさんの家の仕事も手をぬかずきちんとやり、あれ地の*開こんもやり通したのです。

なんとかアブラナを植えてからも、仕事の帰りによっては、一生けん命世話をつづけたので、やがて芽^めが出て、春になると、黄色の花をさかせました。その花の上を、モンシロチョウが金次郎の心を表すかのようにとんでいました。

とれたアブラナの種は、全部でおけに3ばいもありました。手ですくってみると、細かいつぶがさらさらと気持ちよく、指の間をこぼれていきます。

金次郎は、さっそくとれた種の内からかりた分を返すと、のこりを油屋で油にしてもらいました。その帰り道、油の入った*とっくりを大事にかかえて、金次郎は、何度もつぶやきました。



「これは、わたしの油なんだ。これで好きなだけ勉強ができるぞ。」

その夜、さっそく、自分で作った油で明かりをつけました。すると、あんどんの明かりがいつもより明るく感じられ、むずかしい文も心にしみこんでくるように感じられました。

こうして、金次郎は、また、勉強を始めたのです。

*開こん：あれ地をきり開いて田畑にすること。

*とっくり：細長く、口のせまい、酒や油を入れるつぼ。

(5) 捨^すて苗^{なえ}

いつものようにおじさんの家の田んぼ仕事を終えての帰り道、金次郎は、ふとあぜ道に目を向けました。そこには、もういらなくなった稲の苗が捨ててありました。よく見ると、あちらこちらにたくさん苗が捨ててあるではありませんか。それを見た金次郎の目がキラリと光りました。（これはもったいない。この苗にだってまだ命があるはずだ。大事に育てれば、お米がとれるようになるかもしれない。そうだ、さっそく植えてみよう。）そう思った金次郎は1本1本夢中^{むちゆう}になって拾いました。

ちょうどそこへ、仕事帰りの村人が通りかかりました。

「金次郎、そんな苗を拾って何にするんだい。去年のこう水で、お前の家の田んぼは、使いものにならなくなったではないか。どこへ植えるのかね。」

「そんなことしているひまがあったら、早く万兵衛^{まんべえ}さんの家に

帰って、夜なべ仕事をした方が、お前さんのためになると思うがなあ。」

二人の村人は、金次郎に言いたいだけ言うと、わらいながら行ってしまいました。金次郎はくやしきとはずかしきで顔を真っ赤にし、うつ向いていましたが、拾った苗はしっかりとだきしめていました。たとえ村人にからかわれても、金次郎の強い思いはそんなにかんたんにかわるものではありません。苗をだきしめたまま、金次郎は、川の近くにある自分の家の田んぼへ走って行きました。

拾った苗をすぐに植えることができるように、それから毎日草か



りをしたり、大きな石ころを出したりして、やっとのことで*30坪^{つぼ}ほどの小さな田んぼができあがりました。それでもまだ石ころがごろごろしていて、とてもりっぱな田んぼとは言えないほどのものでしたが、金次郎にとっては、この上もないよろこびでした。

田んぼに水を入れると、苗1本1本に、

「かれないで、じょうぶに育ておくれ。」

と話しかけながら、いのるような気持ちで植えました。やっとなんて終わった時、体中どろだらけでしたが、体に^{あつ}熱い力がみなぎってくるように思えました。それからは、雨の日も、風の日も、苗を育てる金次郎のすがたを田んぼで見かけない日はありませんでした。金次郎の^{どりよく}努力はだれにも負けないものでした。

秋になりました。金次郎の小さな田んぼも、重そうに頭をたらししている^{こがね}黄金色の^{いなほ}稲穂でいっぱいになりました。

「おお。これはすごい。」

うれしそうに稲穂を見る金次郎の後ろから、声が聞こえました。そこには、万兵衛おじさんが立っていました。

「こやしがたりないと思ったが、なかなかいいできだな。もっともおれも2、3度入れてやったがな。」

「えっ……。おじさんがこやしを入れてくれたんですか。」

「ああ。ちっとばかりな。

でもおまえの毎日の世話がよかったんだよ。おまえの努力のおかげだ。」

稲穂を見つめる金次郎のほおには、ひとすじのなみだが光っていました。

「捨ててあった苗から、こんなにもゆたかな実りを手にすることが



*30坪：約1^{やく}アール(10m×10m)。教室ほどの広さ。

できた。捨て^すて苗^{なえ}にも命があったのだ。捨て苗が、わたしに大切なことを教えてくれた。おじさんの言っていたのは、こういうことなんだ。」

金次郎は、稲穂^{いなほ}をやさしくなでながらつぶやきました。金次郎は、前に円蔵^{えんぞう}に聞いた、本を読まなくても自然^{しぜん}から学べることもあるという、おじさんの話を思い出していたのです。

稲かりをしてみると、なんと*1俵^{びょう}もの米がとれました。金次郎は、この1俵をもとにして田を広げ、次の年には5俵、2年後には20俵ものしゅうかくをするまでになったのでした。

そして、ついに金次郎は自分の家に帰ることができました。弟二人もよびもどし、もとのくらしにもどることができたのです。金次郎の家から兄弟三人の楽しそうな笑い声が聞こえてきます。



なっとく 金次郎 ④

せきしょう いたい
積小為大って、
どんな教えだろう。



小さな努力^{どりょく}をこつこつと積み重ねていけば、いずれはすばらしいけっかにむすびつくという教えなんだ。

捨てられた苗の1本1本をこつこつと大切に育てたけっか、金次郎さんは1俵の米をしゅうかくし、そして、さらに5俵、20俵とふやしていったんだよ。小さいことでも、ねばり強くつづけていくことが、大きな成果^{せい かい}を手にするにつながるんだよ。



*1 俵^{やく}：約60キログラム